

凜々しく、そして「気品」と「誇り」 第51回卒業式を終えて

久しぶりに附属小の「底力」を感じた1日でした。

3月16日、第51回卒業式。右の写真は卒業式当日の朝の板書です(上から一組)。担任の先生からのメッセージを受け取った子どもたちの表情が目に浮かぶようです。

前日の夜、教室を覗いてみると4人の担任がそれぞれ思いを込めて板書の準備をしていました。また、副担任(副主任)の佐山先生は一人黙々とトイレ掃除を行っていました。1年間、淳先生を中心とした見事なチームワークは最後まで乱れることなく卒業式を迎えました。こういう先生方に小学校最後の1年間を見守ってもらった子どもたちは本当に幸せだったと思います。

卒業式ではまず、子どもたちの「服装」に驚きました。もちろん多少いつもとは違いますが、過剰に着飾ったり、派手さを強調したりするのではなく、気品のあるとても小学生らしい服装に清々しさを感じました。これも6年生の保護者の皆様のご理解があったからこそ、と思います。ここに「最後の授業」を成功させた1つの要因があったように思います。

式の中では何度か胸が熱くなった瞬間がありました。

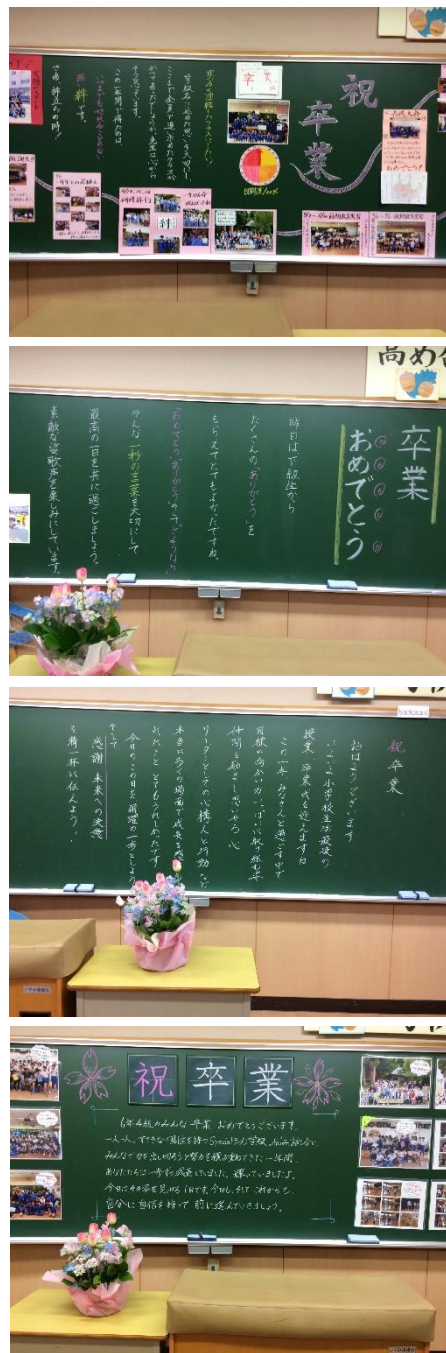
卒業証書を受け取る子どもたちの表情、喜びの歌、合唱「絆」、そして何より胸が熱くなったのは、卒業証書を手一人一人がしっかりと前を向いて歩いていて退場する姿です。この姿こそ私たち附属小の職員が6年間追い求めてきた「体も心もたくましく、しかも、しなやかな子ども」を具現化させているものです。そして、かつての先輩の名言「君たちは歩くことで喜びを運んでいるのだ」が蘇ってきました。

夜の会でも、特に6年生の先生方からよいお話をたくさん聞かせていただくことができました。特に淳先生が「先輩が言っていた1年生から5年生までの先生方の指導があったからこそ今日の6年生の姿があった、という意味が分かってきた」ということは6年生担任として決して忘れてはいけない、大事なことだと思いました。そして、このようにして附属の文化がまた後輩に伝えられていくのだと思いました。

附属小の学校の教育目標は約半世紀変わっていません。

そこには時代が変わっても子どもたちに求める姿が変わってないことがあるからではないでしょうか。卒業式も「歩くこと」「合唱」が表現としてのベースであることは変わっていません。だからこそ、私たちは4月からどこに目標をおいて、日々どんな教育活動を積み重ねていかなければならないのかが明確になっているのだと思います。

今日ほど附属小の一員であることを誇りに感じた1日はありません。6年生の先生方とそれを支えた附属小の全ての職員のすばらしさを実感した1日でした。



(文責：副校長 手代木)